



學會彙報

| | |
|-----|---|
| 雑誌名 | 漢文學會々報 |
| 巻 | 11 |
| ページ | 86-87 |
| 発行年 | 1941-02-20 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00147425 |

學會彙報

○昭和十五年度漢文學科講義題目

尙書注疏演習

支那の家族制

論語朱注演習

禮記注疏演習

禮概説

東塾讀書記演習

支那文學概論

經國集講義

支那文學論(儒林外史を中心として)

支那語學

○本年度卒業豫定者論文題目

爾雅研究序説

老子研究

胡適之論

○本年度學會委員氏名

庶務部 尾關富太郎

會計部 尾關富太郎

荒木雄二

栗原喜男

諸橋 教授

諸橋 教授

諸橋 教授

内野 教授

内野 教授

内野 教授

鹽谷 講師

小野 講師

王 講師

王 講師

岩佐 貫三

高橋 俊英

仲井眞盛信

○春季講演會(第一回)

編輯部

市川憲一

寺尾達郎

龍

牛島徳次

研究部

雄

月洞 謙

新美保秀

鈴木

須藤

功(卒業生)

岩佐貫三

市木武

六月十五日(土)、午後一時より本館第二會議室に於て、本年度第一回講演會は特に現代焦眉の問題として重要視されてゐる支那語問題に關し、東京帝國大學の魚返善雄先生を聘し御研鑽の一端を伺ひ、又從來北京女子師範學院に教鞭をとられた先輩小澤文四郎氏が、今度本校講師に御榮轉になつたのを機會に本講演會を開く。會長諸橋先生初め多數の先輩並に會員出席して開會を待つ時、講師魚返先生急に御病氣との報に接し、急遽順序を變更して開會。

一、開會の辭

一、在燕雜感

學生 岩佐 貫三君
小澤文四郎氏
日支事變勃發直後渡支、爾來北京に三年、其間の見聞體驗に就いて、政治經濟文化の三方面より觀察を進め、北支の現状より將來に及び、新東亞建設に自覺した日本人の實際的指導の必要を強調せられた。

一、支那語學習の能率化

魚返 善雄氏

魚返先生には御病氣の所を特に病を押して御出でになり、長時間に亙り、時々の病苦の發作と闘ひつゝ以下の項目に従ひ日頃の蘊蓄を傾けて下さつた。

- (1) 支那語の範圍と標準
- (2) 支那語學習の目的
- (3) 支那語研究の歴史
- (4) 支那語研究の方法
- (5) 支那語研究の分科と輕重
- (6) 支那語の表記法
- (7) 支那語の文字と發音
- (8) 四聲記憶法
- (9) 話し方と讀み方
- (10) 考へ方と文法
- (11) 支那文の書き方
- (12) 辭書と索引
- (13) 教師と教材
- (14) 參考書批判

一、挨拶

會長 諸橋 教授

一、閉會の辭

學生 岩佐貫三君

○秋季講演會(第二回)

十月廿六日(土)、午後一時より本學西館五十一號室に於て、本年度第二回講演會を開く。會長御病氣なるも、内野先生初め先輩並に會員の聽講多く盛會。

一、閉會の辭

學生 市木武雄君

一、李朝の名賢朴楚亭と清朝文化

文學博士 藤塚鄰先生

從來兎角忽にされ勝であつた朝鮮文化、殊に朴齊家を中心として清朝との文化交流の經緯

を、始終面白く飽くことなく該博なる蘊蓄を傾けて蒙を啓いて下さつた。一同異常の感銘を受く。

一、挨拶

内野 教授

一、閉會の辭

學生 市木 武雄君

終つて藤塚先生を中心に座談會を開き、興を盡して藹々裡に散會。

○研究發表會

一月廿五日(土)、午後一時より本學本館第二會議室に於て研究會を開く。會長諸橋先生初め多數の先輩並に會員出席盛會。

一、閉會の辭

學生 市木 武雄君

一、經書研究の一左證としての爾雅の形態の歪曲に就いて

學生 岩佐 貫三君

一、胡適寸描

學生 仲井眞盛信君

一、老子年代考

學生 高橋 俊英君

一、講評

諸橋 教授

一、閉會の辭

學生 月洞 讓君